

## SHINWA WALK ②

### 熱田大神の楊貴妃伝説

伝説  
そとろ歩き

清水がごとく  
今も流るなり

あおによし  
奈良と唐を  
結ぶ恋



### アフロディーテと楊貴妃

#### 男を惑わす妖艶な魅力

これは、唐の玄宗皇帝の心を虜にしたあの絶世の美女・楊貴妃は、実は熱田大神(天照大神)だったという信じがたい伝説です。

ギリシャ神話で愛の女神といえば、アフロディーテ。ローマ神話でいうところのビーナスに当たります。ちなみに、アフロディーテの息子はエロス。ローマ神話ではキューピッドに当たります。

アフロディーテは、鍛冶の神・ヘパイストスという夫がありながら、万物の神・ゼウス、泥棒の神・ヘルメスと浮き名を流し、挙句の果てにはゼウスの兄で海の神・ポセイドンとも結ばれてしまう、まさに人生のすべてを愛に捧げた女神といえます。

一方、楊貴妃伝説に登場する楊貴妃も、アフロディーテさながらの「その美貌で男を翻弄する妖艶な女性」です。

伝説によると、唐の玄宗皇帝が国力にまかせて、日本を侵略しようとしているという話があり、日本の神々が協議の結果、熱田大神が選ばれて化身となり、揚家に生まれて

楊貴妃となったということです。

そして玄宗皇帝に仕えて心を虜にして、日本侵略を思い留ませ、やがて玄宗は安祿山の乱に遭い、逃れる途中、楊貴妃は命を失いました。しかし、楊貴妃の霊は死なず熱田大神にもどり、舟に乗って熱田の宮に帰り着いたといわれています。

玄宗皇帝は楊貴妃のことを思い出しては泣いていました。そんなある日、通幽という仙術使いがやって来て、皇帝に「楊貴妃さまの魂は蓬萊の地で生きていらっしゃいます」と申し出ました。

喜んだ皇帝の命で、通幽は蓬萊の地を求めて旅に出ます。そしてはるばる海を越えて日本の国にたどり着き、探し求めて熱田の浜に着きました。旅の疲れからか、森の中で眠ってしまい、眠りの中で、美しい姫・楊貴妃が現れます。

通幽が皇帝の思いを伝えると、楊貴妃は「私は帰れません。なぜなら私はこの家の神なのですから」と言って、髪に挿していた金のかんざしを抜き取り、「私の形見です」と渡して本殿の中に入りました。



### 奈良の都の平城京時代 万葉集に思いを馳せて

夢から覚めた通幽は、何かに導かれるように森の奥深く進むと、そこには美しい泉が流れ、泉を覆うように楠の大木が枝を張っていました。楠の木の根元には「楊貴妃の墓」と刻まれた一基の墓があり、その前に金のかんざしが置いてありました。通幽はそれを懐に納め、唐の国に帰っていったという話。

アフロディーテが、恋に生きる奔放な悪女とするなら、熱田大神楊貴妃伝説に登場する楊貴妃は、神力を駆使しつづも最後まで筋を通した天女といったところです。玄宗皇帝の在位は712～756年。日本では和銅3年(710)年)、都は藤原京から平城京に遷され奈良時代となります。

万葉集に「あおによし 奈良の都は 咲く花の 匂うがごとく 今盛なり」と詠まれた平城京の時代です。ちなみに、古事記(712年)や日本書紀(720年)もこの頃に誕生し、東大寺(三月堂完成は748年、大仏完成は749年)



▲清水社奥手の井戸には「楊貴妃の墓の一部」とされる石が今も残っている。



## 2nd Letter

▼神楽殿右手の小道を奥に進んだ所にひっそり建っている清水社。



や唐招提寺(鑑真によって759年に創建され、同年、薬師如来像も完成)も建立されています。

熱田大神、つまりは天照大神が楊貴妃となり、玄宗皇帝の心を虜にして、日本侵略を阻止したという話の真偽は定かではありませんが、ただ一つだけ言える真実は、いつの時代でも男は妖艶な女性に惑わされてしまうということです。

鎌倉時代末期、正和2年(1313年)に出された『淡風拾葉集』には、熱田神宮に「五輪塔婆として楊貴妃墳墓があった」と記されています。

実際に熱田神宮には「楊貴妃の墓」らしきものが残っていて、それは境内の東北部の清水社の近くにあったとされていましたが、貞享3年(1686年)の造営の際に、破壊されたといわれています。

今でも清水社奥手の井戸に五輪塔婆の一部とされる石がひっそりと残されています。歌人を気取って「あおによし 奈良と唐を 結ぶ恋 清水がごとく 今も流るなり」と一句詠みたいところ。

清水社で今もお漂う楊貴妃の残り香を感じ、万葉の時代に思いを馳せてみるのも一興です。

今回は、熱田神宮に伝わる「盗まれた神剣伝説」をお送りします。お楽しみに。

- 写真・Kiyoshi K
- イラスト・Rei
- 取材・文・Icarus

